

# 縁の下から 次世代支える

## 日本研究の今Ⅱ⑤

### 現場へ!

世界中の知の集積である米ハーバード大学。ここから、社会科学の日本研究の発展に尽力する日本人がいる。

藤平新樹(52)が、初めて米国にきたのは小6の時だ。米文学者だった母親の留学に伴って1年間過ごした。高2で母親と共に再び1年渡米。「ヨーロッパ史と哲学の授業が面白くて。一つの事象でも焦点の当て方で多くの見方ができ、問いの立て方も、答えも一つではないと学びました」

米プリンストン大で政治学の博士号を取り、タフツ大助教授も務めたが、2004年にハーバード大のウエザーヘッド国際問題研究所・日米関係プログラムの事務総長の仕事に転じた。政治や歴史など、日本関係の

社会科学の研究者をポストドク(博士研究員)として受け入れ、研究の支援をし、世界各国の大学に送り出す。また、日本の企業、省庁、NPOなどからの客員研究員の英語での研究、論文執筆、プレゼンテーションを指導する。

いったポップカルチャーや人文系が中心となっている。研究者を招いた講演会やワークショップ、少人数の勉強会……。藤平は社会科学の日本研究に関心を持ってもらおうと、年に70ものイベントの企画をしている。政治、経済、歴史といった学科の壁を越えて、幅広い関心呼び起こす環境づくりをめざす。学部生の日本での夏季インターシッピングの世話もする。

「現代日本政治の専門家を世界中に増やし、社会科学の日本研究を分野として確立するやりがいがある仕事です」

今年4月には、1980年代に米通商代表部で対日交渉の責任者を務め、在日米商工会議所会頭などを歴任したグレン・S・フクシマを招き、通商施策の秘話や裏話を聞いた。コロナ禍の前には、蒲島郁夫熊本県知事と県のPRキャラクター「くまモン」をゲストに「Political economy of Kumamon (くまモンの政治経済学)」というイベントを行ったこともある。知事として地域経済の発展をどう考えるか、くまモンを題材に語ってもらった。多くの学生が参加して盛況だった。

藤平自身の米国での研究の経験も役に立っている。米国で研究者として成功するためには、厳しい競争をくぐり抜けなければならない。研究者を取り巻く環境を理解し、支えられると実感している。

今回の連載の第1回で取り上げたように、米国の学生に日本への興味が薄れているわけではない。しかし、漫画やアニメと

今年4月、グレン・S・フクシマ(右から4人目)をハーバード大に招いたイベントでの藤平(左)

高校の卒業式での藤平=いずれも本人提供



藤平新樹。日本への思い入れは強い。東京都中央区



今年4月、グレン・S・フクシマ(右から4人目)をハーバード大に招いたイベントでの藤平(左)  
高校の卒業式での藤平=いずれも本人提供

今回の連載の第1回で取り上げたように、米国の学生に日本への興味が薄れているわけではない。しかし、漫画やアニメと

日本が世界から孤立せず理解され、リーダーシップをとっていけるように、縁の下で支える人たちがいる。

敬称略(おわり)  
編集委員・秋山勲子